卒論タイトル『装丁が読み手に与える視覚的・感覚的変化』
デザイン研究室　指導教員：吉岡一洋　b082h101r　阿佐香里

「本イコール勉強」という構図は教科書を使った学校教育を受けるうちに私たちの中で染み付いたイメージである。ゲームやインターネットなどの娯楽ツールが溢れている今、多くの人にとって、本は勉強道具のひとつであり、読書という行為が親しまれ辛くなっているように思う。近年では夏目漱石、太宰治などの文学作品が新しい表紙デザインで出版されたり、何百冊分の書籍データを記憶した電子ブックが開発されたりするなど、本の世界は刻々と変化し続けている。特に電子書籍の登場は出版業界だけでなく、本の読み手にも大きな影響を与え、本の電子化についての意見もさまざまである。

読書という行為が、文章を読むだけの行為と考えるなら、文章が紙に印刷されているのも液晶の画面で表示されているのも文章の内容が変わらない限り同じである。しかし、私の考える読書は文字情報を取り込むだけの機械的な作業では無い。本を選び、手に取ることから始まり、表紙を眺めながらその厚さや重さを感じ、自分の手でページをめくる。一冊の本には、表紙・見返し・トビラ・目次・本文・背表紙が含まれていて、そのひとつひとつが読者を本の世界へと導いてくれる。同じ姿をした本は存在せず（文庫本は別であるが）表紙は本の内容の性格を表していると言っていい。

読書とはどんな行為なのか、その行為の不思議さを改めて考えさせられた。この論文では「読書」という行為で結ばれた本と人の関係に注目し、私の思う本の魅力を作品で表現を研究する。

目次

はじめに
第1章　本と人
　　1. 本・読書の歴史
　　2. 装丁についての考察
　　3. 題材「赤毛のアン」について
第2章　素材研究と技法
　　1. 不織布の研究
　　2. 技法
第3章　作品考察
　　1.「紙の本」の存在
　　2.　作品
おわりに
参考文献

神道文化をデザインする
—信仰の視覚化—

デザイン研究室　指導教員：吉岡一洋　学籍番号：B082H102P　氏名：石田彩佳

今回の卒業研究では神道をテーマに制作及び研究活動を行った。

筆者は以前から宗教活動というものに興味があった。各宗教固有の文化や習慣の多様さに驚きを覚えると同時に、同じ人間がそれぞれ違った思想を持ち、同時期にこの地球で生活しているということが不思議に思え、また魅力的に感じた。高知大学に入学してから、アルバイト紹介などのご縁があって神社に関わる機会が増えた。神道というものは他の宗教に比べて身近に感じるのに実態が掴みにくく、その分探究心が湧いた。この意欲を形に残したいと考えたのがこの卒業制作及び卒業論文である。

第１章　神道研究

神道とはどういうものなのか、文献から起源を辿る。

また「御神渡り」と呼ばれる現象について調べ、制作の中心とする。

第２章　素材研究

まず素材としてのヒノキの特性について調べると共に、神道との関わりについて探る。

作品に使用するための加工方法を下地・着彩・焼印加工の３つの点から実験を行う。

第３章　作品考察

「ヒノキ材のもつ自然の美しさを最大限引き出すことを第一に、２色の板を組み合わせ設置することで御神渡りの持つ静と動を表現することで我々が神道に触れたときに感じる理由無き敬意を提示する」このことををコンセプトに、第１章・第２章をもとに実際に作品制作を行う。その過程と全体図を掲載する。

この作品は完成に近付くにつれ、当初予定していたものよりもシンプルで素朴なものに落ち着いていったことが印象的であった。

一見何の意思や意図を持たずにみえるものであっても、それ自身の存在感が特別な何かを持って見えてくると人は何かしらの理由を自ずから考え出してしまう。その現象を作品を観ることで呼び起こしてもらいたいと考えた。

ユーフォニアム独奏　マーティン・エレビー作曲　バリトン協奏曲

芸術文化コース　学籍番号 B082H103N　氏名　岩佐 麻衣子
指導教員　脇岡 宗一

1．ユーフォニアムについて

（1）ユーフォニアムの歴史と構造…ユーフォニアムの始まりは、1843年にヴァイーマルのコンサートマスターであったフェルディナント・ゾンマーが開発したゾンメロフォンであるという説が最も有力である。ゾンメロフォンが開発された翌年の1844年、フェルディナント・ヘルが、ゾンメロフォンを改良させた「オイフォニオン」(Euphonion) という楽器を作った。「オイフォニオン」はゾンメロフォンのボアをさらに拡大させた、現在のユーフォニアムに近い太い楽器であり、これがユーフォニアムの始まりというのが一般的な説である。また、ベルギーの楽器製作者アドルフ・サックスが考案した金管楽器（サクソルン属）の一つにユーフォニアムがある。ユーフォニアムは、サクソルン属のバリトンから派生した楽器である。ユーフォニアムはトロンボーンとマウスピースの口径が同じで、管長も同じである。一般的にB♭管で、幾重かに巻かれた円錐管と、通常４つのバルブ（弁）を持っている。

（2）ユーフォニアムの音域…音域はテナー・サクソフォーンやトロンボーンとほぼ同じ中音域を担当している。

2．M. エレビーについて

マーティン・エレビー(Martin Ellerby)は、1957 年にワークソプ(イギリス北部)で生まれる。エレビーは、英国王立音楽大学でジョーゼフ・ホロヴィッツ(Joseph Horovitz)とロイド・ウェーバー(W.S.Lioyd Webber)に作曲を学ぶ。その後、個人的にウィルフレッド・ジョーゼフ(Wilfred Josephs)に師事する。

3．『バリトン協奏曲』について

この楽曲は、BBC Fame Academy とカトリーナ・マーゼラ(Katrina Marzella)からの委嘱作品で2007年に作曲された。1楽章:Fusions 生き生きして活気のある感じでそしてターン(回音)によって情熱的に、そして終わり部分の小節は、幾分‘さりげない感じで’そして未解決(不協和音)のまま終わる。2楽章：Soliloquy モノローグ、独り言という意味であり、演奏が進行するに従って、発展・調整しながら、様々なテーマが次第に複雑かつ感情的に関わり合っていく。3 楽章：Tangents 接線、接面という意味である。二つの対照的な旋律が競い合うように展開する。

サクソフォーン独奏　H.トマジ作曲　サクソフォーン協奏曲

芸術文化コース　　指導教員　脇岡総一　　Ｂ０８２Ｈ１０４Ｓ 岩本恵美

H.トマジについて

本名アンリ・フルディアン・トマジ（Henri Fredien Tomasi)。１９０１年8月１７日、地中海に望むフランスはマルセイユで生まれる。故郷の町で音楽を学んだ後、１６歳でパリ音楽院に入学し、コサード（和声)、ダンディ、ゴベール（指揮)、ヴィダル（作曲）らに師事した。２６歳の時（１９２７年）カンタータ『コリオラン』で作曲部門２位、指揮部門で１位のローマ大賞を獲得したほか、アルファン賞、パリ市芸術賞を受けている。１９３０－３５年インドシナ放送の音楽監督、１９４６－５０年モンテ・カルロ歌劇場の指揮者をつとめ、１９５２年にはフランス音楽大賞を受けている。また同時に作曲家としても国際的に活躍した。１９５２年に事故のためほぼ聾唖となってからは厭世的になったとされている。１９７１年1月１３日パリにて死去。

作品の大半は晩年の１５年間に書かれたものである。フランス近代の和声感を持ちながらも、後期ロマン派から近代音楽まで幅広い書法をとりこんだ折衷的な作風を特徴とした。

トマジはかつて、「地中海の光と色は、私にとって交じり気のない喜びの源だ」と述べた。彼の音楽は、豊かな思想が華麗な音のフレスコ画を作り出すように心からきているという。父グザヴィエ・トマジ、母ジョゼフィーヌ・ヴィンチェンジーニはともにコルシカ北西部のカジンカ地方生まれであるために、トマジの作品にはコルシカを題材にしたものが多い。地中海に浮かぶコルシカ島の美しい景色はトマジの作品から多く読み取ることができる。

サクソフォーン協奏曲　演奏解釈について

１９４９年にマルセル・ミュールのために作曲された作品である。１９５０年３月２日、ミュールによってパリで初演された。ミュールは、サクソフォーンの発展に大きく貢献したサクソフォーン奏者であり、作曲者としての親友である。

この曲は舞台の幕になぞらえた２つの楽章から成る。１楽章は、神秘的な雰囲気に始まり目まぐるしく展開した後、静かに幕を下ろす。叙情的表現と鋭角的リズムが交差し、技巧的なカデンツァを含む、比較的自由なラプソディ的音楽としてまとめられている。唐突に始まる２楽章は、勢いそのままにクライマックスに向けてひたすらに突き進んでいく。舞踏的主題を中心に据えたドライなユーモアも感じさせる音楽である。全体として古典的構成よりも、むしろ独奏者の技巧とリズムの前進力によって一気に聴かせる方法をとっている作品であると言えよう。また、コルシカ島に昔から伝わる民謡に回帰した節がサクソフォーン協奏曲にもみられる。

色彩と絵画表現の関係性

芸術文化コース　西洋画研究室　　指導教員 土井原崇浩
学籍番号 B082H105T　　氏名 内田友紀

絵画において、色彩は重要な要素の一つである。その扱い方一つで、画面上の絵はどのようにでも表情を変える。色彩に興味を覚えて以来、筆者は自身の作品制作の中で常に色について意識し、どうしたら自分好みの色が出せるのかを考えてきた。本論では色彩をその中心に据え、筆者に影響を与えた画家ついて考察し、筆者自身の制作論を通しながら、今回の卒業制作についてまとめている。

第Ⅰ章　ウィリアム・ターナーについて

第Ⅱ章　私的制作論

第Ⅲ章　卒業制作

第Ⅰ章では、筆者がその作品に衝撃を受けた画家「ウィリアム・ターナー」について取り上げている。ウィリアム・ターナーはその鮮やかな色彩や確かな写実力で有名な画家であるが、今回はその中でも筆者が特に心を惹かれたターナーの描く『光』について考察した。ターナーは後期になるに従いより抽象的な表現へと向かうが、同時にその光の表現は鮮やかさを増していく。ここでは、その過程について主に見ていく。

第Ⅱ章では、筆者自身の制作論について述べている。筆者が作品を制作する上でその根底においている主題となる「テーマ」はいったいどのようなものであり、何を考え制作しているのか。また、筆者がなぜ「色彩」に興味を持つに至ったのか、作品制作の過程では色をどのように扱っているのか。それらについて自身の過去を振り返りながら考察している。

第Ⅲ章では、卒業制作についてまとめている。まず、今回の卒業制作におけるコンセプトにふれ、どのような考えを持って２枚の作品を制作したのかについて述べる。そして、その作品の制作過程を、主に色の塗り方について見ていきながら、順序だてて説明していく。

求められる曲とは何か
―東日本大震災時のラジオ番組のオンエア曲・リクエスト曲を中心に―

芸術文化コース　山中研究室　指導教員　山中文　B082H106H　大谷奈々

1．研究目的

私達の日常に音楽は溢れている。そして、時に人は音楽に勇気付けられたり、元気づけられたりする。辛いとき、悲しいとき、あるいは嬉しい時、人々はどのような曲を求めるのであろうか

2011年3月11日に、我が国では、未曽有の災害といわれる東日本大震災が発生した。被災地の人々に限らず、全国の人々は、メディアから流れてくる映像に様々な感情を抱いたと思われる。人々は、その当時、音楽として何を聞いていたのであろうか。そして、どんな曲を求めたのであろうか。また震災直後から時間が経過していくにつれて、人々の気持ちと音楽はどのように移り変わっていったのであろうか。

人々の感情と音楽について、本研究では、震災時のラジオ番組におけるオンエア曲やアーティストの活動などから検討する。

2．内容構成

第1章震災後に音楽雑誌に取り上げられた楽曲
第2章　震災後のアーティストの活動
第3章　ラジオ番組のオンエア曲の傾向

第1章では、雑誌[i]に掲載された、前向きになれる45曲と震災後にリクエスト・オンエアされていた楽曲を取り上げ、楽曲の分析を行った。第2章では、震災後に活躍した二人のアーティストの音楽活動を調査した。第3章では、ふくしまFMのホームページの“SONG SEARCH”をもとにオンエア曲のデータをまとめ、震災前一ヶ月と震災後6カ月のオンエア曲の傾向を分析した。

3．まとめ

本研究を通して震災直後にオンエアされていた曲は、“未来”“希望”“立ち上がる”といった復興に向けた言葉が多く、3ヶ月を過ぎてくると、チャリティーソングや応援歌と共に、恋愛や家族観を歌った、前向きな歌詞の曲がオンエアされていた。震災当初は、自粛をしなければならないという雰囲気が濃厚であり、音楽活動においても、音楽家やアーティストのツアーが中止や延期になった。しかし、そのような自粛ムードは次第に自分たちでできることをやろうというムードに変化し、音楽活動においても、アーティストたちは被災地各地に足を運び、活動を行なっていたことがわかった。

人々の心に訴えるのは、思いやりの気持ちであったり、何気ない会話での言葉であったりする。歌は、そのような言葉や気持ちを感情に直接訴えかけ、音楽的時間を共有することで人々の心に共感を生むのであろう。そこに楽曲の構造が関係するのは当然であるが、今回の調査では、歌の中に被災地の地名が盛り込まれることでより郷土への気持ちを強く持つことができるなど、歌詞と歌の関係に気づくことができた。

本研究をもとに、これからは、人々に影響を与える楽曲や人々が共感できる楽曲とは何かを研究していきたい。

---

[i] 『日経エンタテイメント』2011年6月号、BP社発行、pp.30～33

フルート独奏　　J.イベール作曲　フルート協奏曲

芸術文化コース　器楽研究室　指導教員：脇岡宗一
学籍番号：B082H107K　氏名：片岡綾香

１．フルートについて

フルートは木管楽器の一種である。しかし、他の楽器と違いリードは使わず、息を歌口に吹き込み管の中を共鳴させて演奏する楽器である。現在では、金属製のものが多いが 19 世紀の半ば頃までは、木製のものが主流であった。テオバルト・ベームによって金属製に改善されたベーム式フルートは、今までより操作が簡単になり、速いパッセージやトリルが可能になった。

２．ジャック・イベールについて

ジャック・フランソワ・アントワーヌ・イベール（Jacques François Antoine Ibert）は、1890 年にパリで生まれた、フランスの作曲家である。母から音楽の才能を受け継ぎ、パリ国立高等音楽院に入学した。第一次世界大戦時には海軍士官として従軍し、帰還後ローマ大賞を受賞した。その他、約 100 曲の名曲を残しており、映画音楽やバレー音楽にも貢献した。

３．協奏曲について

協奏曲とはコンチェルトの訳語である。初期バロックにおいては、楽器伴奏付きの教会用声楽曲を指し、後期バロックになるとコンチェルト・グロッソやソロ・コンチェルトが現れた。20 世紀になると、西洋楽器のみではなく日本の伝統楽器とオーケストラの協奏曲も書かれている。

４．フルート協奏曲について

1932 年から翌年にかけて作曲され、フランスのフルート奏者マルセル・モイーズに捧げられた作品である。第１楽章はソナタ形式、第２楽章は静かな緩徐楽章、第３楽章はロンド形式で構成されている。

この曲は技術的に高度なテクニックが要求される曲であるが、技術ばかりに目を向けるのではなく、場面に合った音色を作っていくことが重要である。イベール独特のハーモニを感じ、難しい技術の中でも表現できるよう色彩豊かに演奏したい。

５．卒業演奏

卒業演奏は、2012 年２月８日に音楽棟ホールにて行なわれる。また、２月 14 日に高知県立美術館ホールにて行なわれる「第 33 回定期演奏会」にも出演する。

クラリネット独奏　ヨハネス・ブラームス作曲　『クラリネット・ソナタ第２番　変ホ長調作品１２０』より第１楽章、第３楽章

教育学部生涯教育課程芸術文化コース　指導教員　脇岡宗一　B082H109U　河野佳代

（１）クラリネットについて

定説によると１８世紀初頭にニュルンベルクの楽器製作者ヨハン・クリストフ・デンナーによってシングルリード楽器のシャリュモーを改良してクラリネットを開発したといわれている。現在日本で主流となり、多く使われているクラリネットは、１８４４年にフランスの楽器製作者ルイ＝オーギュスト・ビュッフェとクラリネット奏者のイアサント・クローゼが改良したビュッフェ＝クローゼシステムである。

クラリネットには多くの同属楽器が存在する。ピッコロ・クラリネット（Ｅｓ管クラリネット）、アルト・クラリネット、バス・クラリネット、コントラバス・クラリネットなど様々な楽器がある。

（２）ヨハネス・ブラームスについて

ブラームスはオペラを除いたあらゆる領域の音楽に等しく手腕をふるった。作品の完成度から旋律的魅力の点で甲乙が生じるのが当然であるが、初期から晩年にいたるまでこんなに高水準を保つ作曲家はまれである。ブラームスの作品は古典的に均整が取れている。ブラームスはロマン派時代あるいはそれ以降の作曲家に類を見ないほど形式を自らに課し、形式と闘い、形式を探し求め、形式を創り出した。形式は変奏曲を初めとする古典派的な構成原理を忠実に守り、反ロマン的精神かつ古典派の精神を明確に示した。これこそブラームスの芸術の美しさを示す象徴である。彼は自己批評家でもあった。作品に独創性が欠けていると認めたり、真摯な態度が欠けたら無理せず放棄した。作品の平静さと均衡の背後には厭世主義と諦観から発展したこの独特の世界観があった。しかしブラームスは生涯すべての精力、すべての力を作曲に捧げようとした。そして自己の成就したすべての作品に誇りを持っていた。彼は生涯結婚もせず孤独であったが、彼の魂、心、芸術はすべての人々に与えられた。だからこそ、今ブラームスの曲はどの分野の音楽であっても現役として人々の心を捉え続けているといえる。

（３）『クラリネット・ソナタ』について

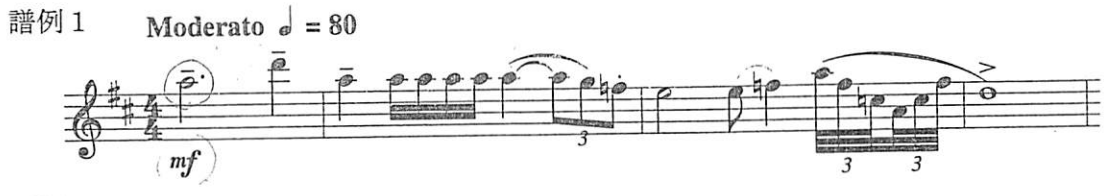
『クラリネット・ソナタヘ短調』及び『クラリネット・ソナタ変ホ長調』の２曲は１８９４年、ブラームスが６１歳のときに書かれた最後の室内楽作品である。ブラームスの最晩年に属する作品だが、晩年の作品に多くみられるような重厚さよりもむしろ単純明快さを持ち、親しみやすい作風を示している。また、ブラームスの１８９１年から１８９４年間にいたる３年間は、姉エリーゼを始めとする多くの親しい人の死が訪れたので、その悲しみによる憂鬱さ、それを征服しようとする激烈さ、老齢の諦観が表れているといえる。

フルート独奏　セルゲイ・プロコフィエフ作曲　フルートソナタ１楽章２楽章

芸術文化コース　脇岡研究室　指導教員脇岡総一　学籍番号 b082h110p　小松若奈

フルートソナタ作品 94 は、独ソ戦のためプロコフィエフがモスクワを離れて疎開していた時期に唯一作曲されたフルートの曲。フランス在住時代からのプロコフィエフは、大好きなフルートのための曲を書きたいと思っていた。作曲を開始したのは 1942 年 9 月、アルマアタにおいてであるが、スケッチはその数年前にすでに書かれていた。翌 1943 年 8 月にペルミで完成し、同年 12 月 7 日にハリコフスキーのフルート、リヒテルのピアノでモスクワにおいて初演された。この作品の形象の世界は、純朴な叙情、微笑ましいスケルツォ、時折、古典的な音楽形式へのひょうきんな呼びかけがのぞく。詩的な叙情のオアシスは輝くような夢想でもあり、戦いが求めていた幸福の象徴であった。初演では好評を博したものの、その後フルート奏者にはあまり注目されず、時を置かずにヴァイオリンソナタに改作されることになった。今日、演奏の際にはプロコフィエフが書いたそのままではなく、ヴァイオリンソナタ改作版を参照してフルートのパートに手を加えることが一般的に行われている。

譜例１



譜例２

第一楽章　モデラート　二長調　四分の四拍子　ソナタ形式

のどかに歌われる第一主題（譜例１）、舞曲風（譜例２）の第二主題が次々と呈示され、リズミックな走句とともに展開部へうつる。ロシア的詩情をたたえた各主題が転調して展開されたのち、呈示部の約半分に縮小された再現部が続く。やがて第二主題、第一主題を織り込んだコーダが余韻を漂わせながらこの楽章をしめくくる。

第二楽章　プレスト　イ短調　四分の三拍子　スケルツォ

生き生きとしたピアノの序奏に導かれてフルートが主要主題を呈示、二つの楽器が軽快なやりとりを展開して中間部（ポーコ・ピウ・モッソ、二長調、二分の二拍子）に入る。憂いを含んだフルートの旋律が現れ、さらにピアノとフルートのおどけた走句がつづく。ピアノの弾奏とともにスケルツォが再現、冒頭の主要主題を用いたコーダによって終止する。

ピアノ独奏　H.デュティユー作曲　ピアノ・ソナタ第３楽章「コラールと変奏」

教育学部生涯教育芸術文化コース
器楽研究室　　指導教員：宮田信司　　学籍番号：B082H111N　　氏名：菅原志帆

１．H. デュティユーの生涯

現代フランスを代表する作曲家。１９１６年１月２２日、フランスの西部に位置するアンジェに４人兄弟の末子として産まれる。ドゥエ音楽院でヴィクトル・ガロワに最初の音楽教育を受ける。１９３３年、パリ音楽院に入学し、ジャン・ガロン（和声）、ノエル・ガロン（対位法、フーガ）、アンリ・ビュッセール（作曲）、フィリップ・ゴベール（指揮）、モーリス・エマニュエル（音楽史）の指導を受ける。１９３８年にはローマ大賞を受賞した。

２．H. デュティユーの作風

デュティユーの音楽は無調性と施法性の間を揺れており、あまりにあからさまに音の行き先がわかってしまいそうな硬直した構造を除いた傾向が特色といえる。また１９６１年には次のような言葉を書いている。「明らかに、どの作品にも、内的な発展に従って独自の形式がある。あらかじめ作られた枠組みから離れようとするこの形式と構造の問題は、徐々に私の重大関心事になってきている。」

３．ピアノ・ソナタ　第３楽章「コラールと変奏」

１９４６年、戦争が終結した当時、３０歳の節目を迎えたデュティユーはパリ音楽院で共に学んだ女流ピアニスト、ジョヌヴィエーヴ・ジョワと結婚する。学生時代から意欲作を次々と世に送り出していたデュティユーは、この年、習作としてではなく「作品１」と自ら意識して、ピアノ・ソナタの作曲に手を染めた。デュティユーはこの記念すべき作品をジョワに献呈した。第３楽章の冒頭では荘厳なコラールが響き渡り、その音形を基に展開される４つの変奏で構成されている。

４．演奏解釈

主題の部分であるコラールは殆ど和音によって曲が進行する。この時、音は硬くも響きのある音色を意識し、低音部は深く重みのある音で弾く。変奏曲Ⅰでは打楽器のように演奏し、硬く音にムラができないように注意する。変奏曲Ⅱでは p ではあるが芯のある音で流れるように弾く。一方左手は音の移り変わりが分かるようにはっきりと弾く。　変奏曲Ⅲは全体的に pp で弾くが中音域に出てくるテーマを浮かび上がらせるように弾く。この時上昇系の和音などは途切れることのないよう、ペダルを効果的に使い、光と闇が溶け合うようなイメージを持って弾く。変奏曲Ⅳからは少し緊張感を持ちざわめきを表現する。そして徐々に高まる緊張を終盤で解放させて弾く。最後に出てくる曲の導入部と同じコラールではアラルガンドとあるように、より壮大により華やかに重みを持って弾く。和音の変化を感じながら栄光を浴びるイメージを持って弾ききる。

５．卒業演奏

卒業演奏は 2012 年 2 月 8 日に音楽棟ホールで行う。また、2 月 14 日に高知県立美術館ホールにおける「第 33 回定期演奏会」にも出演する。

トランペット独奏　C.ヘーネ作曲　スラブ幻想曲

芸術文化コース 脇岡研究室 指導教員 脇岡宗一 学籍番号 B082H112S　氏名 高尾悠也

１．トランペットの歴史・種類

トランペット（trumpet）は、現在幅広いジャンルにおいて用いられている非常にポピュラーな楽器の一つである。金管楽器の花形といえばトランペットのことを指し、音色は、女性の肉声に近いことから、私たちになじみやすい要素をもった楽器である。また、この楽器は全体が小さくまとまっており、それでいて輝かしく明るい極めて大きな音を出せるため、各国の軍隊では昔から<ラッパ>と称して、野外において命令、信号などの意志の伝達手段として使われていた。現在日本ではＣ管とＢ♭管、また３つのピストン・バルブによる管の長さの変化と、バジングの程度によって音階を調節するのが最も一般的なトランペット（後述のピストン・トランペット）と呼ばれるものである。古典派の時代はナチュラル・トランペットが使用されており、この時代はピストンやバルブといったものが開発されておらず、音階を調節し奏でる事が出来なかった為、ティンパニとともに主音や属音の強調に使用される事が多かった。本項では、この他に管の長さの違いによる分類等を研究した。

２．トランペットの構造

金管楽器の構造は、発音機構部、ハーモニクス作成部、音量音質決定部とを管で連結した形態になっている。本項では、図を用いて各部分の構造ついて各部の役割・機能、また、国によるバルブ（ピストン、ロータリー）の種類・音色の違いについて研究をした。

３．演奏曲目研究

C.ヘーネ作曲のスラブ幻想曲を、実際の楽譜を用いて各部分の表現の仕方を研究した。

連続性を利用した快適な椅子のデザイン

芸術文化コースデザイン研究室
指導教員　吉岡一洋
B082h113T 髙木瑠似

卒業研究において、デザインゼミでは「化（カ）」をテーマに制作を行った。このテーマを元に自身が制作する椅子を媒介にして「化」、変化することの意味合いを考えていくこととする。

私は制作前から椅子に興味があり、大学入学当初から、制作のモティーフに椅子を取り入れることも度々であった。それ自体がもつ存在感やフォルムの多様さ、腰を掛けるという同じ機能を果たしているにも関わらず、そのかたちに絶対的なものはない面白さに魅了されていた。４年次でも、その関心は続いていたため、今回大学生活最後の制作に椅子を作ることにした。それまで平面ばかりの制作であったが、かたちの面白さを的確に捉え、伝えるためには立体での表現が的確だと思い、今回実際に立体の椅子をつくることにした。

昨年、2011 年春に発生した、東日本大地震において、それまで信じていたものを再考しなくてはならない状況に陥った。その時、絶対的なものはない、と思い知らされた。

この変化はとても衝撃的で何を信じていいか分からず今信じていること、見えていること全てに不安を感じた。しかし、身の周りをよく見返してみると、変化していないような日々の生活の中には、小さな変化があることに気付いた。その変化は目に見えない位ささいなもので変化していない様に見えるあるときもある。だが、確かに何気ない同じように見える時間の中に常に変化は存在している。変化とは当たり前の日常に潜んでいるのだ。だが、その時間を何度もくり返し、多くの時間を経て大きな変化となる。

今回起こった地震での、いくつもの変化もそうした日々の繰り返しの中に起こった変化であり、受け入れていくしかないものである。こうした「変化」について私たちがどうとらえていかなくてはならないのかを卒業制作及び論文で表現し、考察した。

第１章：序

「椅子」とは何かを文献から解釈。

第２章：考察

空間的「連続性」について論じる。「連続性」と「変化」という２種類の対象の間にある概念の相違性を椅子の側面を媒介にして考察。

第３章：制作

２章での考察をもとに見出した形と、表現したい思想から椅子を制作する。

第４章：結論

制作した「椅子」を、これまでの一連の流れを元に自分なりに解釈することで変化していくことの意味考える。

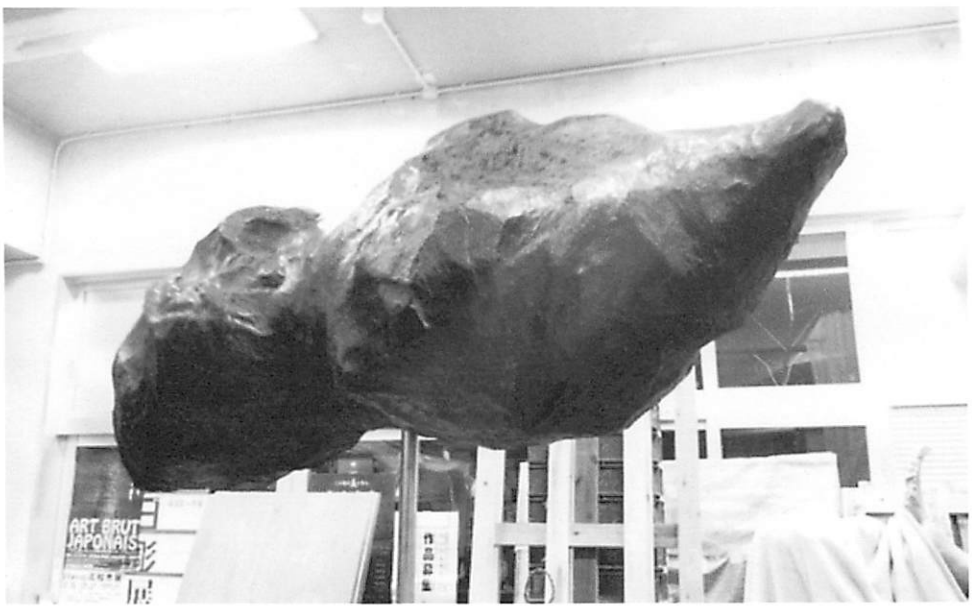
発泡スチロール芯を使用した乾漆技法

彫刻研究室　　指導教員　阿部鉄太郎　　B082H114H　多田佳織

漆という素材は、高価な漆器の印象が強く、かぶれるという特質があることで敬遠されがちであり、また私も例にもれず漆を畏れ避けていた一人であった。香川漆器の有名な香川に生まれ、出身高等学校に漆芸コースがあったにも関わらず、最近まで漆という素材に近付くことがなかったのは、ひとえに自分が、漆の魅力の多さと扱いの難しさに躊躇していたからである。工芸品としての漆器のイメージは香川漆器を鑑賞する度強くなり、自分の専門としている美術という分野との接点も、なかなか見出すことが叶わなかった。私は早くに漆と出会っていたにもかかわらず、それを素材として認識していなかったのである。

しかし、大学で彫刻を専攻して、彫刻素材として漆を使った乾漆技法に出会った。それは私にとって、初めて素材としての漆に出会った瞬間でもあった。幸いなことに私は漆にかぶれにくい体質であったようで、乾漆技法を用いて制作をするようになるのにそう時間はかからなかった。何千年も耐え得るとされる強硬さや実材としての深みだけでなく、乾燥にかかる時間の長さや手間、配合やチューブによって微妙に変わってくる色、長時間作業が続くとかぶれるというリスクも含め、素材としての漆に魅了されてしまった。素材を扱うにあたって、自分の制作に合わせて使うのではなく、むしろ素材に合わせて準備をし、制作するような、「使わせていただいている」という感覚を、私は漆にふれて初めて感じたのである。

今卒業制作では、その漆を用いて、私を含む日本の学生たちの「安定を求めて危険を回避するために、個人の価値基準の成形を置き去りにした姿」を、「落ち着きどころが見つからず浮游し続ける雲」に例えて、発泡スチロール乾漆技法での雲の制作を行った。



ピアノ独奏　W.A.モーツァルト作曲　幻想曲ハ短調K.475

芸術文化コース　器楽研究室　指導教員：宮田 信司　学籍番号：B082H116M　氏名：田村 明日香

１．モーツァルトの生涯

ヴィーン古典派三大巨匠の一人といわれるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、1765年にオーストリアにてレオポルト・モーツァルトとマリア・アンナの間に生まれた。父レオポルトはモーツァルトの音楽に対する才能を早くから見出し、幼少時からモーツァルトに音楽教育を与えた。また親子で何度もヨーロッパ各地に大旅行を行い、自身を宣伝する為に演奏を披露してまわった。これは、よりよい就職先を求めたりするためであったが、結局どこの宮廷でも就職は失敗に終わる。1781年、25歳になったモーツァルトは故郷であるザルツブルグを出て、ヴィーンに定住する。音楽家として、演奏会やオペラの作曲、レッスン、楽譜の出版などで生計を立てたが、晩年までの数年間は経済的困窮に悩まされた。1791年、レクイエムの作曲の最中に病に倒れ、同年12月5日に35歳という若さで亡くなった。

２．モーツァルトのピアノ作品

モーツァルトはピアノ作品としてピアノ・ソナタ、変奏曲、舞曲、前奏曲、ピアノ協奏曲など様々なジャンルの作品を作曲している。その中でも数多く作曲されたものがピアノ・ソナタであり、その特徴とみられる伴奏の書法が、「アルベルティ・バス」である。これは低声部に分散和音ないしはアルペッジョを用いた伴奏の一種で、モーツァルトはピアノ・ソナタ作品において頻繁にこの書法を用いている。また後のベートーヴェンのピアノ・ソナタ作品の中でもこのアルベルティ・バスは多用化され、古典派のピアノ・ソナタの特徴として欠かせない書法となった。

３．幻想曲について

幻想曲とはファンタジアとも呼ばれ、形式にとらわれず楽想のおもむくままに作曲された楽曲を指す。しかし時代によってその定義は様々で、古典派以後になるとファンタジアは完全に「幻想」という意味で、厳格な構成を持たず、自由な楽想の展開による作品を指すようになる。

４．「幻想曲ハ短調K.475」について

1785年5月20日にヴィーンで作曲された。この曲は「ピアノのためのファンタジア」と題されて独立した作品になっているが、「ピアノ・ソナタハ短調」(K.457) と同時に出版された。モーツァルトの幻想曲の中で最も優れたもので、また最も論理的にできている。その構成は極めて自由大胆でしかも論理的に良くまとまり、深い抒情性と華やかな演奏効果が巧みに融合している。

５．演奏解釈

悲劇的な動機に始まるこの楽曲は、全体を通してテンポや調性が様々である。まとまりごとの特徴をよく表現できるようにする。テンポが遅いところは旋律が停滞しないように、またテンポが速いところは慌てないように留意したい。作曲当時のモーツァルトの絶望感や懐古などの感情が反映された楽曲であるため、それを一音一音を通して伝えることができるように演奏する。

６．演奏会

平成24年2月8日の卒業演奏会、また2月14日の定期演奏会にてこの楽曲を演奏する予定である。

制作活動における精神論　～ロマン派の画家たちを通して～

芸術文化コース　西洋画研究室　指導教員：土井原崇浩　B082H117U　田村奈央

筆者は大学に入るまで絵画作品を制作したことがほとんどなく、それまでは授業の課題などでしか制作してこなかったのだが、大学に入り自分の作品を制作するようになってから次第に抱くようになった疑問があった。それはなぜ自分は絵画を描くのか、なぜ絵画という表現方法でなければならないのか、制作するという行為そのものにおける筆者なりの意義とは一体何かというものであった。動物や植物、風景などの「自然物」を題材に制作してきた筆者だが、抽象的なものではなく、写真にも映像にも残すことのできる具象の題材をあえて絵画にするという行為の理由、筆者なりの答えを見つけるべく模索しこれまで制作を続けてきた。そのような大学時代で学んだことのなかで特に筆者に影響を与えたのが近代の美術史におけるロマン主義という思想であった。その思想に強く共感を覚え、またロマン主義を代表する画家たちの作品に筆者は大きな影響を受けた。そのなかでも特に印象深かったのがJ・M・W・ターナーという人物であった。それらとの出会いは、筆者の制作における考え方を大きく変えるものであり、またロマン主義の画家たちの作品は少なからず筆者の作品にも影響を与えるものとなった。それによって得た現段階での筆者の理論を、卒業制作を通して述べている。内容は大きく分けて以下のようにまとめた。

第1章　制作活動における筆者の理論
第2章　ロマン主義思想との出会い
第3章　制作過程

第1章では、まず筆者がこれまで題材としてきたものをあげ、なぜ繰り返し同じ題材を描いてきたか、そこに込めていた意味を紹介する。そして筆者の大学時代における過去の作品を数点あげ、それらと照らし合わせながら当時の心情をもとに、描く意味に対する思案とそこから得ていた筆者なりの理論を説明している。

次に第2章では、筆者に大きな影響を与えたロマン主義の思想についての解説およびロマン主義とほぼ同時期に起こった新古典主義との比較を行っている。更に筆者が制作において特に影響を受けたJ・M・W・ターナーについても詳しく紹介したのち、彼の作品を1点あげて彼の理論のどういった部分に衝撃を受け、また共感を持って、筆者の理論がどのように変化したかを述べる。

最後に第3章では、これまでの思案やロマン主義との出会いのなかで変化した現段階での筆者の精神論をもとに行ってきた卒業制作における作品の内容および解説と、その制作過程を紹介する。

打楽器独奏　J.カーナウ作曲
ソロパーカッションとシンフォニックバンドのためのコンチェルティーノ

芸術文化コース　脇岡研究室　指導教員：脇岡宗一　学籍番号 B082H118Y　土屋広太

1.作曲者について

1-1 J.カーナウの経歴

J.カーナウはアメリカの代表する作曲家である。学生時代にユーフォニアム、指揮法、作曲法、編曲法について学んでいる。すでに数々の曲が賞を受賞し、作曲した作品はすでに400曲を超えている。

現在はケンタッキー州ニコラスヴィルにて作曲を行っている。

2.楽曲について

2-1 概説

ソロパーカッションとシンフォニックバンドのためのコンチェルティーノは、United States Navy Bandの打楽器奏者であったRobert Sniderために1988年に作曲した曲である。

2-2 作曲者の解説

本楽曲についての作曲者の解説を載せる。

3.演奏解釈

3-1 第1楽章 Allegro scherzando

第 1 楽章はティンパニーをはじめとする膜鳴楽器で構成されている、非常にエネルギッシュな楽章である。ソリストとバンドの掛け合いが多いのでバランスに注意する必要がある。

3-2 第2楽章 Adagio, ma non troppo e espressivo

第 2 楽章は鍵盤楽器を中心に構成されている。第 1 楽章とは違い、ゆったりとしたテンポの楽章である。中間部の Allegretto e leggiero では軽さ、機敏さを明確にする。

3-3 第3楽章 Allegro deciso

第3楽章はスネアドラムを中心に構成されている。複雑なリズム、f でのユニゾンが多く、非常に華々しい楽章とも言える。ソリストの各楽器とバンドのバランスに注意する必要がある。

ソプラノ独唱
バーバー作曲　G.ケラー作詞（J.ジョイス英訳）
3つの歌 op.45より
第一曲『もう私はうんざりするほどバラを食べてしまった』

バーンスタイン作詞・作曲
5つの子供の歌『私は音楽が嫌い』

芸術文化コース　小原浄二研究室　指導教員：小原浄二　b082h119x　常岡由美

私は卒業研究として　バーバー作曲　3つの歌 op.45より『もう私はうんざりするほどバラを食べてしまった』と、バーンスタイン作曲　5つの子供の歌『私は音楽が嫌い』の二作品、計6曲の演奏に取り組んだ。

まず、3つの歌　op.45はG.シャーマー社より1974年出版された。今回演奏する第一曲『もう私はうんざりするほどバラを食べてしまった』は、1972年3月にイタリアのスポレートで作曲された。バーバー晩年時の作品であり、歌曲においてはこの作品を最後に作曲されておらず、自身の幼少期から親しんだ作家の詩に万感の思いで作曲した作品である。

次に、5つの子供の歌「私は音楽が嫌い」は1942年作曲された。この当時、バーンスタインはバレーの伴奏や歌手の指導で収入を得ていたが、その休むことのない練習は同居人、エディス・メレルをして「音楽なんて大嫌い！」と言わしめ、それが作品を生むインスピレーションを与えたという。翌1943年出版された「私は音楽が嫌い」はメリルに献呈されている。

取り組みとしては、感情が伴った歌唱表現を重視し、研究しようと試みた。二作品とも歌詞がとても独創的だったため、歌詞解釈を入念にしつつ、英語表現における発音に重点を置いて表現を工夫した。具体的には、テンポや音の跳躍に左右されないよう、一つ一つのフレーズを感じながら子音を出して語りかけるようなイメージをもって全体的にアプローチした。また、発音表現に伴う発声に関しては、楽曲を深めていく中で歌詞を重視すると響きが無くなり、重視すると歌詞が埋没する、といった状況に何度も陥った。原因としてはポジションが上がり、ブレスコントロールができず、音に十分な響きを与えられなくなることにより、響きに意識が行って表情がなくなり、発音が鈍ってしまうということがあげられる。そのため、ブレスコントロール練習を重点的に行い、歌詞のリズム読みをすることで楽曲内でのブレス練習を行い、改善に努めた。

課題としては、楽曲に合わせてつけるジェスチャーを、自然と体が歌唱表現に伴ったようにすることである。楽器である自分自身を最大限に使い、この楽曲を表現できるよう全力を尽くして研究していきたい。

コントラバス独奏　S.クーセヴィツキー作曲
コントラバスとオーケストラのためのコントラバス協奏曲より第１楽章

器楽研究室　　指導教員：脇岡宗一　　学籍番号：B082H120S　　氏名：徳廣李恵

１．コントラバスについて

コントラバスの直接の祖はそのなだらかな肩の類似したヴィオラ・ダ・ガンバ属の最低音楽器ヴィオローネ（ダブル・ベース・ヴァイオル）である。そこから１６世紀に発展し、合奏楽器としてヴィオローネと併用して用いられ始めた。楽器全体の大きさ、細部の形、弦の数、調弦は時代や国によってさまざまであったが、やがて今日の形、最低音をＥとする４度調弦が広く行われるようになると、５弦も用いられるようになった。

弦から駒を通って表板に達した物理的振動が、内部にある魂柱と呼ばれる棒によって板へ伝わり、胴内での共鳴を表板にあるｆ字孔で外部へ伝える。弦の振動や張力によって生ずる駒の圧力が大きくかかるので、裏板に力木をはりつけて補強している。

２．S.クーセヴィツキーについて

1874年7月26日ヴィシニー・ヴォロチョク生まれ、1951年6月4日没。1894年モスクワ音楽院卒業後コントラバスの希代の名手として活躍、1900年からは母校の教授もつとめた。1903年コントラバス奏者としてベルリンに登場、ボッテジーニ以来の名コントラバス奏者と評されたが、1907年指揮者としてベルリン・フィルハーモニーにデビュー、その翌年ロンドン交響楽団を指揮。1910年～18年までロシアで自己の名を冠した管弦楽団を組織してこれを指揮し、コンセール・クーセヴィツキーを設立、フランスその他の新しい音楽の初演にも力を注いだ。

クーセヴィツキーは豪壮でダイナミックな指揮を以って知られ、二十世紀の特異な大指揮者の一人といわれている。

３．コントラバス協奏曲について

この曲は1902年に書かれ、クーセヴィツキーが書いたのはメロディー部分のみだとも言われている。

冒頭の伴奏から始まる情熱的な部分と中間で出てくる２拍子の美しいフレーズの対比をつけるようにする。

４．卒業演奏

卒業演奏は2012年2月8日に音楽棟ホールで行う。また、2月14日に高知県立美術館ホールにおける「第33回定期演奏会」にも出演する。

古典絵画技法による作品制作

芸術文化コース　土井原研究室　土井原崇浩　　B082H121T　長冨哲也

ヨーロッパに古くから伝わる絵画技法を用いて作品を制作することが、本卒業論文の趣旨である。目次としては、まず古典絵画技法を用いた作品を制作するにあたって、それに付随して現れる用語や絵画技法などの一般的な情報をまとめている。

そしてそれらに基づいて制作された絵画の制作過程を記録し、制作論としてまとめたものである。

サクソフォン独奏　H.トマジ作曲　バラード

芸術文化コース　器楽研究室　指導教員:脇岡 宗一　学籍番号:B082H122H　氏名:仁木 真美

●サクソフォンの歴史

1840 年ごろ低音の補強のためにアドルフ・サックスによって作られたバスサックスが最初のサクソフォンである。その後弦楽器のように音色がそろった同属楽器群を生み出すために、ソプラニーノからコントラバスまで 7 種類のサクソフォンが作られた。アメリカではジャズ誕生と共に、ヨーロッパではフランスでクラシックサクソフォンの名手が誕生し、サクソフォンは一気に有名になった。もともとの運指の容易さや音色や音量のコントロールのしやすさなどに加え、楽器の改良も進み、現代でもポップス、ジャズ、クラシックなど様々な音楽において活躍を果たしている。

●H.トマジの生涯

アンリ・トマジ（Henri Tomasi）1901 年にコルシカ島出身の両親のもと、マルセイユで生まれる。パリ国立高等音楽学校でヴァンサン・ダンディ、ジョルジュ・コサードらに師事。1927 年にはカンタータ「コリオラン」でローマ賞作曲部門 2 位、指揮者部門の 1 位を獲得した。1952 年事故にあい、ほぼ聾唖の状態になる。1971 年その生涯に幕を下ろす。享年 70 歳。

●H.トマジ作曲の「バラード」について

このトマジ作曲の「バラード」は 1939 年に作られ、トマジの親友で当時世界最高のサクソフォン奏者として活躍していたマルセル・ミュールに捧げられた曲である。

タイトルにある「バラード」とは、もともとは詩の一形式を表わす言葉だが、18 世紀以後は、物語の内容を持った器楽曲のタイトルにつけられるようになった。このトマジ作曲の「バラード」も楽譜には S.マラールの詩が添えられている。S.マラールとは、トマジの妻であるスザンヌ・マラールのことである。マラールの詩の内容はとても叙情的なもので、「ためらいがちに鳴り響くサクソフォン」がひとりの道化師を苦悩と絶望から立ち直らせるものとして登場する。

●演奏解釈

この曲は大きく４つの部分に分けられ、冒頭はイギリス古謡に基づくテーマが示された後、サクソフォンが主題を奏で、叙情的な旋律と和音構成が魅力的で、展開しながらクライマックスへと達し、もう一度古謡が再現され終結する。第二の場面はジーグと呼ばれる舞曲で活発テーマが楽しく奏でられる。中間部には喜びや感謝を感じさせる壮大な旋律が現れ、「道化師」というイメージから想像される単に滑稽なだけの音楽では終わらない味わい深い音楽が創り出されている。第三の場面は一転しジャズの手法を取り入れたブルースとなり、感情的な起伏の激しいフレーズの後、苦悩、悲しみの極限にまで達すると第四の場面となり、気を取り直したかのように、希望に溢れるジーグ（第二の場面の舞曲）が再現されて、華々しく曲を終える。

添えられている詩で語られていたように、おどけた外見の道化師がもつ葛藤が、曲の中でのテーマやメロディに表れているため、その表情の違いや感情の揺れを表現するように演奏する。

●卒業演奏

卒業演奏は 2012 年 2 月 8 日に音楽棟ホールで行う。また 2 月 14 日に高知県立美術館ホールにおける「第 33 回定期演奏会」にも出演する。

エリック・サティに学ぶ新しい芸術の在り方

芸術文化コース　高橋研究室　指導教員　高橋美樹　B082H124M　福嶋彩

Erik Satie (1866～1925)は、ロマン派時代、いち早く独自の道を築き印象主義の音楽を奏でたフランスの作曲家である。意識的に虚飾を取り去った、非論理的な音楽の作曲家として、また、奇妙なタイトルを持つ作品の作曲家として知られている。このような既存の音楽を覆す革新的な取り組みから、サティは「音楽界の異端児」、「音楽界の変わり者」などと称されている。更に、同じフランス出身の作曲家であるドビュッシーやラヴェルらにも大きな影響を与えたことから、西洋音楽の伝統に大きな扉を開いた革新者と認識されている。

また、サティは「音楽は、本来家具のようにただそこに存在し、気に留めるべきではない」という「家具の音楽」の概念を提唱した。これは、現代のBGM音楽や、フィーリングミュージックや、環境音楽などの、空間音楽と呼ばれる音楽の基盤となっている。

サティが提唱した「家具の音楽」は様々な形に姿を変えて、我々の生活の中に溶け込み、今日まで受け継がれてきた。サティの音楽に一番影響を受けたドビュッシーは、自由な和声法を用いて印象主義音楽を切り開いた。ジョン・ケージは《４分３３秒》で、楽音以外の音に聴衆の意識を向けさせ、騒音を含めた全ての音は音楽だと唱えた。マリー・シェーファーは、環境の音全体を音風景としてとらえる「サウンドスケープ」の概念を提唱した。ブライアン・イーノは、聴くことを強制せずに何気なく聞かれることを意図した環境音楽の分野を開拓した。

このように、サティの「家具の音楽」は、人々と音楽の付き合い方に新たな可能性を示してきた。そして、サティの望んだ通り、今や音楽は我々の日常生活のあらゆるところに存在するようになった。その中の一つに、音楽で環境や空間をデザインする「音環境デザイン」というものがある。しかし、我々の日常生活とはかけ離れた芸術の領域では、この音楽デザインはまだまだ未開拓の分野である。音楽デザインそのものにも、目立って効果的と言える運用は現在あまり見られない。

では、今までの社会生活に密接した公共空間と違う、芸術の領域における今後の音楽デザインの在り方はどうあるべきだろうか。また、我々の日常生活とはかけ離れた芸術の領域において、サティが提唱する「家具の音楽」の概念を効果的に活かすことは出来るのだろうか。

本研究では、調査や実験により、芸術作品の展示の際に、雰囲気を作りの目的として音楽デザインを用いることを提案した。音楽デザインは、作者の作品に対するイメージやメッセージを、観る人に分かりやすく伝える、芸術と人とを繋ぐ音デザインである。そして、このような、作品に対する理解を誘発する為の音楽デザインが、今後の新しい音楽デザインの在り方であると考える。

「化」から捉えた「あぶく」をテーマとした作品制作における研究

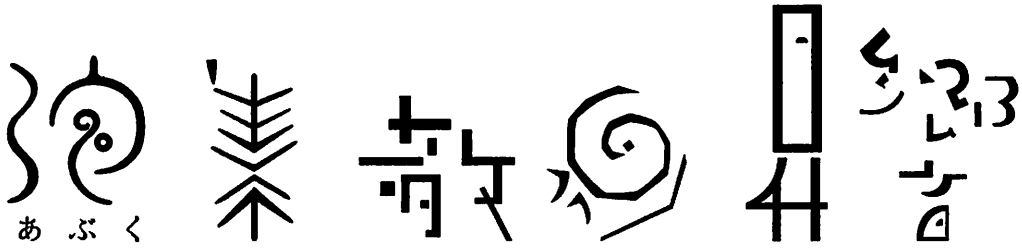
芸術文化コース　デザイン研究室　指導教員：吉岡一洋
B082H125U　本澤侑季

デザイン専攻のテーマとして設定した「化」から、私が研究対象として選んだのは「あぶく」である。水さえあればどこにでも存在することのできる「あぶく」。無数の円形の構成によって様々な形を成す姿はとても面白く、無機的な動きの繰り返しに心地よさすら覚える。その生まれては消えての繰り返しを見ていると、「あぶく」は変化し続ける存在なのか、それとも長い目でみると、どんな形をしていようが「あぶく」という認識に変わりのない、変化のない存在であるのかという疑問が残った。

「あぶく」について自身の解釈を持つために、様々な「あぶく」を観察し、描き留めた結果、「あぶく」には様々な性質が存在することに気がついた。私が「あぶく」から捉えた「化」の性質は、漢字で表すと「集」、「散」、「廻」、「昇」、「響」の５つである。

この５つの性質を表現するために、性質を表すロゴタイプを作成し《図１》、ポスターとして展示することを試みた。

《図１》



研究を通して、「あぶく」は「化」であるのか、それとも「化」ではないのかについての自身の結論は、『「化」でありながらにして、「化」でないもの』である。「あぶく」とは、様々な性質を持ち、幾多にも姿を変えるものであるが、その全てが「あぶく」という１つの対象に集約され、私たちもそれらの違いを気にすることなく「あぶく」として認識するのである。このことは、《図１》で示した「泡」のロゴタイプで説明することができる。水の流れが、ある溜まり場に流れ込む、つまり何かの作用を受けることによってそこに気泡が生まれ、その中で様々な世界が繰り広げられる。一見それぞれの性質によって意味が異なるようにも捉えられるが、その全ての「化」を含めて「あぶく」という言葉が存在すると考えられる。

ポスター制作においては、平面且つ文字情報を漢字１文字のみとする、限られた条件での表現に非常に苦戦した。その結果、１文字の持つ情報伝達の役割の大きさ、１文字の持つ可能性の無限さを実感することができた。また、「あぶく」の生み出す形の面白さの発見から、日頃身の回りにあるにも関わらず気にとめていなかった様々なものにも、モノづくりの可能性が秘められていると気づくことができた。

音楽科におけるコダーイ・システムの運用について

芸術文化コース　山中研究室　指導教員：山中文　学籍番号：B082H126Y　氏名：松井晴佳

1. 研究の目的

日本の音楽教育における歌唱指導は、学習指導要領により「移動ド唱法」を原則とすることが定められている。しかし、実際には「移動ド唱法」が学校現場に定着しているとは言い難い。このような読譜指導の状況は、子どもたちの音楽授業に対する苦手意識につながるのではないだろうか。

ハンガリーの音楽教育では、コダーイ・ゾルターンによるコダーイ・システムが実践されている。このシステムで行われる読譜指導は、移動ド唱法の原則に基づいている。コダーイ・システムによって学んだ子どもたちは、移動ド唱法を正しく理解し、高い読譜力を身につけることができるといわれる。

本研究では、コダーイ・システムを取り上げ、その学習段階や指導方法を考察すると共に、日本にコダーイ・システムをどのように応用すれば移動ド唱法を効果的に実践できるのか考える。

2. 移動ド唱法と固定ド唱法

移動ド唱法とは、「各々の調の主音をDoとし、Do,Re,Mi,Fa,Sol,La,Siと歌う方法」である。一方固定ド唱法とは、「個々の音に音名を付けて歌う方法」で、「Doをハ音に固定させる方法」である。日本の学校教育では、音楽を取り入れた当初から歌唱指導に移動ド唱法を採用している。大正時代末期から昭和時代にかけて固定ド唱法に替わったものの、その後移動ド唱法が復帰した。

1947年の最初の学習指導要領では「移動ドレミ唱法」が原則とされ、以後現在に至るまで、歌唱指導には移動ド唱法が用いられる。固定ド唱法には移調や転調に対応できるという利点があるが、調性感覚を養うのには向いていない。また音名と階名どちらにも同じ「ドレミ…」を用いることで混乱が生まれ、音階の学習に支障をきたしている。音楽において音と音との関係性や個々の音の役割を学ぶことは必須であり、そのために移動ド唱法の正しい理解が求められる。

3. コダーイ・システム

コダーイ・システムは「すべての人のための音楽」を基本理念とし、さまざまな優れた教授法を取り入れた教育システムとなっている。その中でも「トニック・ソルファ法」や「ハンドサイン」は移動ド唱法の原則に基づいている。また、コダーイ・システムでは音楽のさまざまな要素を分類し、細かく学習段階を定めている。長期的な学習計画に基づき、初期段階から移動ド唱法により正しい調性感覚や音楽知識を学ぶことで、音楽能力の向上を可能にすることがわかった。

4. 我が国におけるコダーイ・システムの運用

コダーイ・システムはハンガリーの文化に基づくものでそのまま日本に取り入れるには難点がある。しかしコダーイ・システムの段階的学習課程や、移動ド唱法を用いた歌唱指導過程は、日本の音楽教育にも取り入れられる可能性があり、多くの研究もあることがわかった。特に移動ド唱法については、日本でもその有効性について研究されている。指導においては、教師の移動ド唱法の正しい理解と共に、子どもたちに調性感覚を養わせるための歌唱体験の組織化が求められる。

5. 主要参考文献

・L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ『音楽教育メソードの比較　コダーイ、ダルクローズ、オルフ、C.M』全音楽譜出版社(1994年

・吉田孝『豪モ異ナル所ナシ』(2011年)関西学院大学出版会

・園部三郎『自立せよ、音楽教育』(1980年)音楽之友社

立体造形における素材研究

芸術文化コース　　彫刻研究室　　指導教員　阿部 鉄太郎　　B082H127X　丸岡 敬子

日本の能面や神楽面、土俗面、アフリカやアジアの仮面には装飾的な美しさだけではなく、何か奥の深い魅力にひきつけられる。

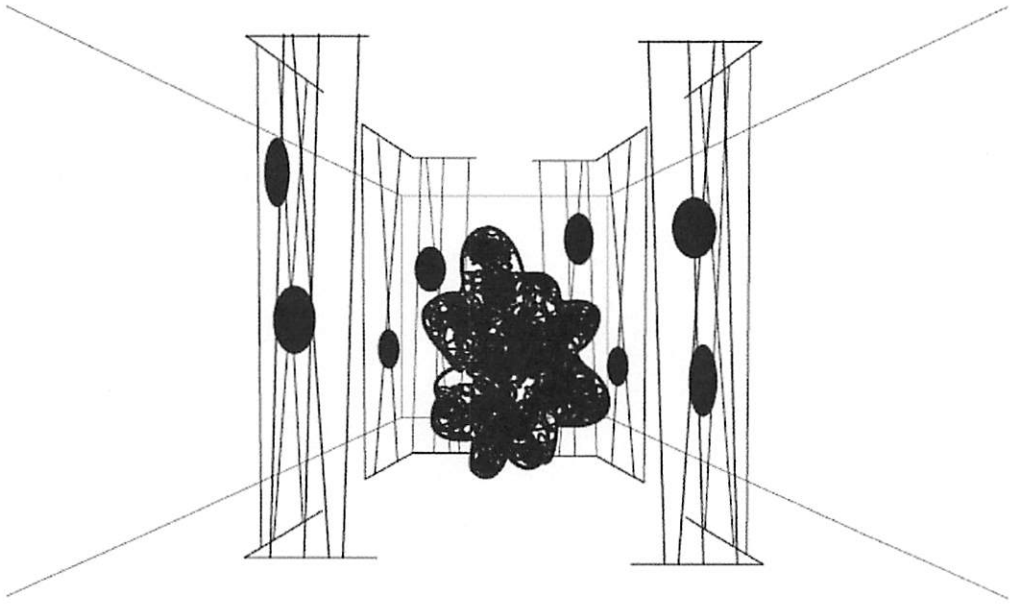
以前、仮面をかぶり人前に出る機会があった。さほどしっかりとした仮面ではなく、厚紙に絵を描き目の部分に穴を開けただけの簡単なものであった。しかし、何もかぶってない時よりも堂々と振舞えるようになり、自分であるけれども自分で無いような、すがすがしくもあり奇妙な感覚を体験する事となった。

そのときの体験によって仮面が与える心理的効果を確信する事となり、さらに仮面に対する興味を抱くようになった。

こういった体験をもとに卒業制作までに仮面をテーマとした作品４作品を制作し、卒業制作は連作の最終形態という位置づけにしようと考えた。

本論文では、３年次から行ってきた制作から学んだ事をもとに、テーマに合った素材の利用の方法を探り制作していく過程を叙述する。

・卒業制作展での展示予定図



卒業論文題目　「木材工芸における刳物（くりもの）の一考察
～酒卓『巡り』と盛器『hope』の作品制作～」

木工研究室　指導教員　吉光誠之　B082H128R　元久洋美

私は教育学部生涯教育課程芸術文化コースに所属し、３年次より『木工（木材工芸）』を専攻としている。そのため、卒業制作でも同じく、その制作を行う。私が学んでいる木工の技法は一つの木材を刳って自由な形を生成することができる刳物（くりもの）の技法である。今回の卒業制作でも刳物の制作を行う。今までの制作の反省を踏まえて、卒業制作では「もう一度自由な造形にチャレンジしよう」という点と「今までの作品の発展として更なる技術の向上を目指す」という点を制作する二つの作品それぞれの目標として据えることにした。

酒卓『巡り』の制作では「もう一度自由な造形にチャレンジしよう」を目標にして、机という大きな作品に取り掛かった。大きいからこそ表現できるような造形に挑戦にしようと制作に臨んだ。盛器『ｈｏｐｅ』の制作では「今までの作品の発展として更なる技術の向上を目指す」を目標として制作を行い、今までの制作での長方形の一連してきた形でデザインを考えることにした。優しさが宿るような作品を作ろうと思った。

第１章　制作動機
1-1　木工専攻での研究について
1-2　制作における自己のテーマ
1-3　木工専攻での制作遍歴

第２章　制作工程
2-1　酒卓『巡り』の制作
2-2　盛器『hope』の制作

謝辞
参考文献

トランペット独奏　　H．トマジ作曲　　『トランペット協奏曲』

芸術文化コース　器楽研究室　指導教員：脇岡宗一
学籍番号：B082H130H　氏名：山﨑　千穂里

１．トランペットについて

トランペットは、金管楽器族に属するリップリードの管楽器の１つである。その原型となった古楽器は、先史時代から存在していたことが証明されており、歴史の長い楽器である。当時の材質としては、金、銀、青銅のほか、土器、貝、象牙、木、樹皮、竹、瓢箪など型もさまざまで、長さの異なるものもあった。当時これらは主に宗教、政治上の儀式、軍隊や競技などにファンファーレや信号として使われていた。

２．トマジについて

アンリ・トマジ（本名：アンリ・フルディアン・トマジ *Henri　Fredien　Tomasi*）は、１９０１年8月１１日にコルシカ島出身の両親のもと、フランスのマルセイユに生まれた。マルセイユ音楽院で学んだ後パリ音楽院へ進んだ。彼が２５歳になる１９２６年にアルフェン賞パリ市芸術賞、翌年１９２７年には、カンタータ「コリオラン」でローマ大賞作曲部門２位、同時に指揮部門の１位を獲得した。１９５０年代半ばからは作曲に専念。１９５２年５１歳の時に事故に遭い、ほぼ聾唖となってからは厭世的になったとされている。彼が５２歳になった１９５３年にフランス音楽大賞、パリ市音楽大賞を受賞。活動の中心は指揮者としてのものであり、作品の大半は晩年の１５年間に書かれたものである。１９７１年1月１３日７０歳でパリにて死去した。

３．『トランペット協奏曲』について

１９４８年頃に作られたトマジの『トランペット協奏曲』は、ジョリヴェの作品とともに２０世紀のトランペット協奏曲を代表する名曲として、多くのトランペット奏者が演奏する曲である。曲は３つの楽章からなり、軍隊風のそぶりを見せる緊張感のある第１楽章、ハープの分散和音を巧みに使った夜想曲的な第２楽章、打楽器を効果的に使ってコミカルな味を出した第３楽章など、どれもコンパクトかつ効果的にまとめており、演奏効果は大変高い。しばしばコンクール課題曲にされるトランペッターには有名な作品で、トマジの作品の中でも特に洒落ていて聴きやすい作品の一つである。

４．演奏解釈

５．卒業演奏

卒業演奏は 2012 年２月８日に音楽棟ホールで行う。また２月 14 日に高知県立美術館にて行われる「第 33 回定期演奏会」にも出演する。

ハイヒールに内在する意味への一考察

教育学部生涯教育課程芸術文化コース　デザイン研究室
指導教員 吉岡一洋　学籍番号 B082H131K　氏名山本 真理

私は常に女性という存在に強い興味を抱いている。自分が女性であるという理由に加え、女性特有の外見のフォルムや男性との考え方、感じ方の相違など、自分が女性であっても不思議に思うことは多くあり、そういったことについて考えることはとても面白い。この思いは、今まで制作してきた作品の中にもいくつか見受けられ、女性に対する興味を作品で表現することは私にとってとても魅力的なことである。

大学4年間を通して様々な表現方法を学ぶ機会に触れ、作品にその表現方法を反映させることで新しいものを制作してきた。今回の作品は新しい表現方法への挑戦と今まで学んできた表現方法とが合わさったものとなる。デザインという領域のなかで女性という存在を表現するための方法はとても自由なものであり、作品を制作する上でその自由は戸惑いや期待という両方の側面があった。しかし、その自由な表現方法によって、また新たな発見や学びといったことがこの作品を制作する過程で多く存在した。それらを感じとることができた今回の作品は私にとってとても貴重なものである。

作品は、ハイヒールを履いている女性の外見的な美しさではなく、身体の肉体的な質量、その内部に含まれた感情などをヒールという華奢なもので支えているという、危うさ、華奢なヒールの強さを表現しており、私はそこに美しさを感じとることができた。女性からしか見出せない魅力的な部分を、未熟でありつつも形にすることが出来たことに満足している。

今回の卒業制作を通して学んだことは多く、特に作品を制作する上での準備や工程が作品の完成度に大きな影響を与えるということを改めて学ぶことができた。そして制作を進める上で、作品の素材や制作方法、必要な道具等の知識をしっかりと取り入れ、理解することがとても重要であり、ひとつひとつの工程を丁寧に行なう意味を考えることや、想定していたように作業が進まなかった場合の工夫などが結果的に作品の完成度を上げることへとつながっていくことを強く実感した。

制作を進める中では、自身の知識や技術の未熟さに気持ちが落ち込んでしまうこともあったが、ひとつひとつの工程が終了し、作品が少しずつ形になっていく様子を見ていくことはとても充実した時間であった。

今回の作品では初めてのことに挑戦する難しさや楽しさ、それに対して自身がどう行動していくかなど、本当に様々なことを学ぶことができた。それは制作活動だけではなく、これから先の自身の行動へも大きく影響していくものとなるだろう。